

シコンチン錠を1日10mgから投与を開始しましたが、痛みが少し残るといふことで、その後、1日20mg内服してもらうようになりました。その結果、痛みはほぼ完全になくなり、趣味で以前から参加されていた俳句の会にも自転車に乗って出かけられるようになり、奥様と旅行にも行かれました。」

適切なオピオイドに出会うと出会わないでは、まさに天国と地獄くらいの違いがあることを如実に物語ってくれたケースでしょう。痛みを取ることでこの患者さんは従来の生活を取り戻すことが可能になったのです。「オキシコンチン錠のメリットは、少量から内服で使えることです。副作用も比較的少なく、うまくコントロールして使えば、痛みを上手にコントロール出来ます。がんはものすごく痛い病気と考えられています、大きな誤解です。緩和ケアを受けることができた患者さんでは、そのようなケースはむしろ稀と言えるでしょう。」と藤本医師は強調する。

## 痛み治療は他の先生との連携になることが多い

「緩和ケアを始めるときに、抗がん剤治療をどうするのかと悩ま

れる患者さんが居られます。抗がん剤治療を続けるべきかどうかは、その効果と身体の状態に因るものであり、効果が期待される場合には、並行して緩和ケアの治療を始めるべきだと思います。両者の治療はいつも対極的な捉え方をされがちですが、抗がん剤の治療も、緩和ケアも目指すところは同一で、「治療によって自分らしく生きる時間を得ること」に他ならないのです。抗がん剤治療によって獲得する時間を、さらに痛みなどの苦痛を感じることなく質の高いものにしてくれるのが緩和ケアなのです。抗がん剤治療を行う先生が、痛みのかたまりに理解があり、うまくオピオイドを使ってくれるのが理想なのですが、残念ながらこの両方の治療を専門的に同一の医師に依頼することは難しいでしょう。従って、抗がん剤治療を担当する医師と緩和ケア医との連携が非常に大切になります。」と藤本医師は語る。

## 痛みの治療は在宅でも十分に可能です

むしろ家のほうが気持ちの面で、痛みの治療に良い影響を及ぼしているのではないかと思うほどです。オピオイドの薬も、最近は経

口薬、貼付薬、坐薬など注射以外にさまざまな種類が使い、在宅でも選択肢は多様です。住み慣れた自宅で生活出来ることは、時間や空間的な拘束が多い入院生活とは雲泥の差があります。入院や通院しているときには「病人」という気持ちに否応なく引っぱり込まれることもあるでしょうが、在宅で症状の緩和がうまく行えれば、病気を意識することなく、これまでと何ら変わらない生活を送ることが可能です。よく言われることですが、病気にはなっても病人にはなるなという言葉があります。痛み治療が功を奏してくれば、病気ではあっても病人ではないのですから、それが痛み治療の最大のメリットでしょうか。さらに、抗がん剤も最近では経口で注射に匹敵する効果を有するものも見られるようになってきており、在宅療養中でも併用できる場合があります。

戦後の日本では「最期は自宅で」、というのが一般的でした。それが本来のあり方なのでしょうが、今ではそれが逆転して病院で最期を迎えるケースがほとんどです。しかし、がんの場合でも、痛み治療をはじめとする緩和ケアがうまく行え、家族の協力があれば、自宅で最期を迎えるという本来の

姿を取り戻せるのです。

## 「眉間のしわを、目尻のしわへ」を

痛みの緩和の効果は家族にも波及していきます。「隣がんの痛みが目立っていましたが、痛みの治療が功を奏してからは、眉間のしわは消え去り、目尻のしわが増え、笑顔が見られるようになりました。本人がそうなるのと周りの方も違ってきました。奥様もにこやかになりました。」と藤本医師は語る。まさに痛み治療の成果ここにある。

本人がにこやかに明るくなると、周りの人も明るくなり、それがまた患者さん本人にもよい影響を及ぼす。その結果、旅行に行ってみたり、自分の趣味を楽しむなど、さらにQOLは高くなるのです。このような治療を容易にするのはオキシコンチン錠のように少量から始められるオピオイドの存在が大きいものと考えられます。さらに、今年2月から使えるようになったオキシノームは、オキシコンチン内服中の突出痛に対してのレスキュー薬としての効果を有し、より一層のがんの痛みの治療の普及が期待されます。